

## 監訳者あとがき

本書は、チャン・トゥアン著『南部—歴史・文化の概要—』（文化・文芸出版社、ホーチミン市、2014年）の全訳である。

チャン・トゥアン博士は、1957年12月2日にトゥアティエン・フエ省で生まれ、元々フエの中学校の教師、副校長であった。1980年から1986年にかけては、フエ師範大学で、勤労(幹部)学生として勉学に励んでいる。その後、1986年にバクリエウ高等師範学校に移り、2007年から2008年にかけてバクリエウ大学教育学部副学部長に就任した。2008年にベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学に赴任し、2013年から歴史学部にも所属し2018年まで副学部長の重責を担って来た。この間、1993年から1997年にかけて、ホーチミン市社会科学院の修士課程で学び、1999年に名称変更になった南部社会科学院の博士課程に所属し、2004年に歴史学博士を授与されている。博士は、本書以外にも多数の著書・論文を有し、2017年には本書の続編を上梓している。また2012年には、前日本学部長ゲン・ティエン・ルック博士が編集した『日本とベトナム—19世紀末～20世紀初頭の「文明開化」—』（ベトナム教育出版社）に論文を寄稿していた。いわば12年に及ぶ長いバクリエウ(北遼)生活が、本書の随所に生かされていることが分かるのである。

さて本書の翻訳は、ハノイ大学日本学部ゲン・ティ・ミン常勤講師が、全ページを下訳した。それを監修者が、原文と付き合わせながら校閲した。昨年3月末から始めたものの作業は難航した。第1はできる限り意識を排して原文に忠実な訳を目指すことにしたこと。やむを得ず意識した部分もある。第2はベトナム史の専門書として堪えられる水準に高めようと努力したのである。第3はベトナムの古典を漢文(字喃)に戻って参照しようとしたことである。ベトナムの古典の多くが本来漢文(字喃)で書かれており、それをベトナム語に訳したものを日本語に重訳することは、適切ではないと判断したからである。特に第3の作業では、漢文の該当か所を探すのに多くの時間を要した。

ではベトナム史を専門としていない監修者に何故校閲の依頼があったのであろうか。それはベトナムの新興宗教であるカオダイ教研究を通じて、南部のカマウ調査の経験の有していたからであり、カオダイ教経典を日本語に訳した経験があったからであろう(例えば、『失われるシクロの下で—ベトナムの社会と

歴史一』ハーベスト社、2017年参照)。思えば後に国会議員にまでになったカオダイ単一聖会のリーダー、カオ・チュウ・ファットがバクリエウの巨大地主であり、祖父は潮州人であったこと、またカマウのカオダイ・ミンチョンダオ・ゴックサック聖座に「福医院」という漢方医院が設置されていることなど、こうしたことは、事前に本書に接していれば、その背景を容易に理解出来たことであろうと、今更ながら残念で仕方がない。さらに何故カオ・チュウ・ファットが、ミンチョンダオ時代に、風光明媚なハティエン(河僊)に「バット・クアイ・ドー・ティエン」(八卦図天)という聖室を設置したかったのか理解出来たであろう。

いずれにしても従来一般的であったベトナム史全体ではなく、南部を焦点とした本書は、ベトナム南部の歴史と文化を理解する際に、有用な文献になるに違いない。

2020年3月7日

ホーチミン市に於いて

橋本和孝